## 八月十三日

時出發、 あつた。折角來たので黑龍江の水で顔を洗つて見た 供 も恐ろしい。是より江岸づたいに埠頭に出る、大筏は無數に繫留 美しいが江岸に幾重にも張りめぐらされた鐵條網は明瞭に觀取ら して流れてゐる。 岸の小高い處にある招魂社に參拜す、すぐ下には黑龍江は洋々と 內され御婦人連に湯茶の接待を受け中飯を取る、小憩して黑龍江 子、 誇張して見せてゐる、驛までは軍の好意でトラツクに乘る、 待つた大黑河見學は許可された。風邪つ氣や下痢氣味で昨日は作 して其の上に多勢の婦女子が遊んでゐる、洗濯をして居る者もあ の如くに乗せてもらつた。 輕爆機の如きは、 先週の日曜日は張鼓峯事變の紀念日で外出なく、 神武屯を過ぐれば間もなく黑河の街は望まれた。すぐ驛に着 吾々も其の筏を越えて五、 滿洲國官吏の案內で繁華な支那街を通つて兵士ホームに案 黑龍江を右に眺めて高原の中腹を走る 對岸ソ聯のブラゴエシチエンスクの街は靜かに 残されては一大事と相當無理して朝から元氣を しきりに遊飛して始めて見る國境は不氣味に ソ聯の仕掛も猶能く視ようとの心も 六○○噸位の貨物船の上甲板に子 鷲が飛んで黄金 今日は待ちに

凉風に流れ來る「ギタ」の音に、柄にもなく感傷に誘はる」を覺 黑河の街、 黑龍江の夕暮は實に詩的だつた、 露西亞人であらう

奴をなぎ倒してゐる、忠臣らしい、 何處ともなく街を歩いた、 相當立派な舞臺で宮本武藏張の勇士が出る。 遇然にも芝居小屋の前に出たので中 何か臺詞を云つて居るが皆 奴も出

> 歸ろうと之を拾つたが仲々高い事を云ふ、通り合せの同邦人は仲 はやたらに喧しかつた、言葉が解らないので十人ばかり無料で見 に入つて安く負けさして吳れた、やつぱり日本人は親切だ。 目解らない、王様の様な人が出て勇士は平伏した。 時間もたつたし驛までは大分の距離なのでマーチョに乗つて 金屬性の樂器

大連、 洲へ赴き、蒙疆学院に入学した。 氏はそのため翌年卒業するや満洲へ渡って就職し、 翌日ハルビン着、 迫って来ていた。小林道彦と益田卯咲は戦死している。 参加した学生たちの多くは大陸の風物に魅了されたらしい。 奉仕隊は八月二十一日朝、 旅順を見学して二十五日出港、 夕刻出発して新京、 兵士たちに見送られて帰途についた。 しかし、暗黒の時代はすぐそこに 二十七日神戸に上陸した。 奉天を経て二十三日大連着 大村氏も再び満 石川

## 16 臨時セメント教室開設

美術教室設置の件が許可された。規程は次のとおりである。 昭和十四年十二月二十七日、 本校が文部省に申請した臨時セメン

臨時セメント美術教室規程

第一條 本校ニ臨時セメント美術教室ヲ置

第一

一條

第 條 本教室ヲセメント彫塑部、 本教室ノ定員 各部修業期間 ハ兩部ヲ合シテ約十名ト ハ一箇年、 授業細目及時數ハ別ニ之ヲ定ム ス 但シ時宜ニ依

セメント工藝部ニ分ツ

リ其員數ヲ增減スルコトアルヘシ

第四條 兼修志望者ハ學年ノ始ニ於テセメント彫塑部、又ハセ

はそ、女芸、果己、食多い書い香いは交各半形第二星手にント工藝部ノ一ヲ選ヒ兼修願書ヲ提出スヘシ

ノ在學者中實技成績優秀ニシテ當該科部ノ推薦ニ係ル者第五條 本教室ノ課程ヲ兼修シ得ル者ハ本校各科部第二學年以上

ニ限ル

第六條 兼修ニ要スル實習費ハ生徒各自ノ負擔トス 乗修志望者定員ヲ超過セル場合ハ詮衡ノ上許否ヲ決ス

ジタル者ニハ考査ノ上兼修證書ヲ授與スルコトアルヘシ第七條 兼修ニ就テハ本校ノ試驗規定ヲ適用セスト雖兼修ヲ修了

第八條 兼修者ニ就キテハ特ニ規定スルモノム外本校生徒ニ關ス

ル規程ヲ準用ス

附則

本規程ハ昭和十五年一月八日ヨリ之ヲ施行ス

臨時セメント美術教室教授細目

一、セメント彫塑部

附がなされた。

1、セメノト 既兌 (犇

1、セメント概説(講義)

2、セメント基礎工作(講義ト實習)

3、セメントノ着色ト塗装(講義ト實習)

4、セメント彫塑(實習)

一、セメント工藝部

1、セメント概説(講義)

2、セメント基礎工作(講義ト實習)

4、セメント工藝(實習)

同教室設置の理由は左記の上申書(控。別紙省略)に明らかであ

る。

臨時セメント美術教室規程許可方上申ノ件〔十一月七日発送〕

リ臨時セメント美術教室規程ヲ設ケ度候間御許可被下度此段上申寄附セラレタルニ付志望ノ生徒ニ之ヲ實習セシムルタメ別紙ノ通並ニ普通教育手工用材料トシテノセメント使用工作法ノ研究費ヲ日本ポルトランドセメント同業會專務理事畑中善造ヨリ美術實材

候也

年月日

文部大臣宛

學校長

ポルトランド・セメント同業会の寄附金は昭和十五年度が三千円

同十七年度にはセメント統制会会長浅野総一郎より三千円の寄

作版画ノ作リ方』 クレオン染』(大正十四年)、『中学校作業ノート』(昭和六年)、『創 職した。 年同県師範学校を卒業し、同校教諭を長くつとめ、 用された。矢崎は明治二十七年九月二十日山梨県に生まれ、 指導者としては、 ント工芸』(同十年)、 ント工』(同十四年) 同教室は森田亀之助が主任を兼務することになったが、 その間、 (同)、 昭和十五年一月二十二日付で矢崎好幸が講師に採 図画および手工教育の分野で活躍し、『染色芸術 などの著書がある。 『最新図案教程』 『卵殻モザイクノ作り方』 (同十一年)、『実技詳解 セメント工芸に関して造 (同八年)、『セメ 昭和十四年に退 実際上 大正四

号。昭和十年二月)にはその功績が次のように紹介されている。国セメント作品展審査員などもつとめた。『帝国工芸』(第九巻第二して山梨から賞金を授与され、各地でセメント講習会を指導し、全詣が深く、昭和七年には教育上に利用したセメント工芸の研究に対

る。 た。 に至つた。 建築にも利用され、 てゐる。さればその利用範圍は頗る廣く、 獨自の美術的風格を有し、その製品は彫刻家方面からも推賞され を自由に調節され宛も飴細工の様に扱ふことが出來るばかりでな メント工作新技法等を發見してセメント工藝の一般化を基礎づけ 亘つて苦心研究を續け、最近に至り漸く加工混合劑、 用範圍を擴大して工藝方面にも利用せんと考を起し爾來十餘年に が需用された有樣を見て、土木や建築のみでなく、更らにその効 會會員)は大正十二年の關東大震災の復興に際し夥しきセメント 「藝品を生み出すことが出來、 この新技法によれば、混合劑の多少によつてセメントは柔硬 玩具、文鎭、柱掛等をはじめ大理石、 且つ着色も自由となつたため、 從來全く不可能とされてゐた硝子とセメントの密 着も 出 メント の工藝的利用 空瓶にセメントで装飾を施した花瓶、 粘土、 石膏と並んでその工藝化が期待される 山梨縣立師範學校教諭矢崎好幸氏 しかもセメント特有の堅牢さと、 思ひ通りの型思ひ通りの色の タイルの代用品として 試作品に付てその一斑 電氣スタン 着色材、 全 來 セ

臨時セメント美術教室の授業は毎週木、金曜日の第五、六、七時

二十三名、 行われることになった。 限に限り、 校改革の際に廃止され、その時矢崎も森田も退職した。 修志望者は彫刻科と工芸科の生徒がその大半を占め、 四年生三名が兼習した。 臨時セメント美術教室 授業開始は昭和十五年一月二十五日で、 (図画師範科の向って右 なお、 同教室は昭和十 当初は三年 一隣り) 九年の本 で 生 兼

## ① 渡辺素舟の中国旅行

査員 芸美術』監輯 十五年)として図案の研究を続け、日本工芸美術会第 まれ、愛知県立第一中学校、 での編著が次のように記されている。 漆芸院賛助員となった。大正、 白木屋美術部顧問 工芸家聯盟同人(同十二年)、可志和会同人(同年)、 に東洋大学専門部を卒業。それと同時に『図案工芸』の編集に従事 図案家渡辺素舟(本名清重郎) 装飾美術家協会々員(大正八年)、工芸通信社同人(同十一 著書も多く、本学所蔵自筆履歴書に 美術評論家協会会員(同四年)、 (同十五年)、七人社顧問 東京高等工芸学校嘱託 (同十一年)、日本図案家聯盟常務理事 (同七年)、 明治大学高等予備学校を経て大正五年 (同年)、 多摩帝国美術学校教授(同十年)、『工 (昭和七年)、 昭和期の工芸図案界の代表者の一人 は明治二十三年十一月十六日に 帝国美術学校講師 商業美術家協会顧問 は昭和十三年十二月現在す 帝国工芸会嘱 无型同人(同 (同年)、 一回展覧会審 (同六年)、 (同三 日本 同

窓飾標準図案集 昭和二年四月図案工藝年鑑 大正十五年度

2案工藝社刊

平安堂刊